

あしよろ・ハードサポート通信

4月から新年度を迎え、学校でも入学式や始業式が行われていました。自分も学校へ通っていたころはクラス替えにドキドキしていたことを思い出します。一方酪農場では、子牛がハッチを「卒園」して群飼養へ「入学」したり、群移動という「クラス替え」が季節を問わずに行われています。

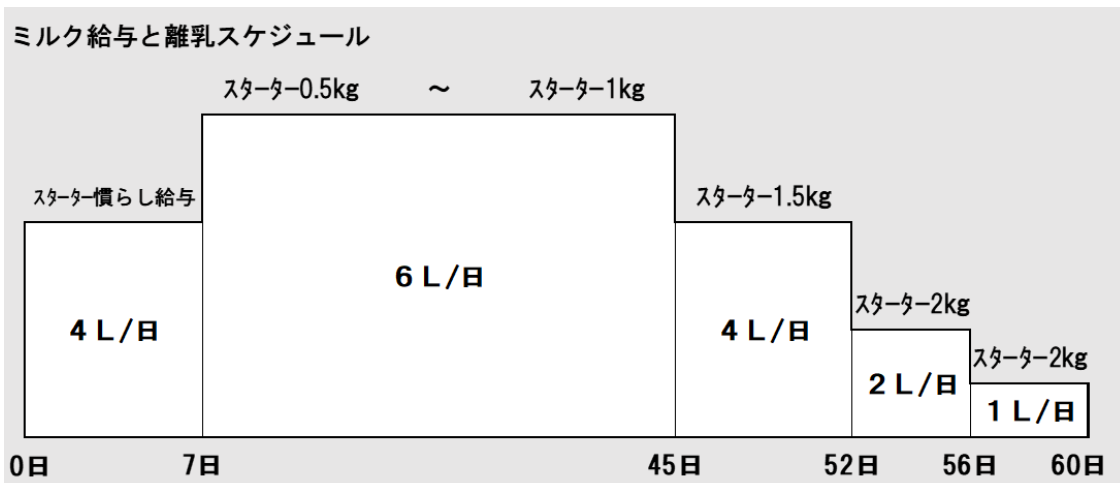
◆ 哺乳を「卒園」する際に

哺乳子牛の飼養管理方法は酪農家さんによって様々ですが、哺乳子牛には必ず離乳という大きなミッションが訪れます。今まで毎日飲んできたミルクが無くなりスターターや牧草などといった固形物のみの摂取になるので、多くの場合で子牛には離乳ストレスがかかります。さらに離乳後には飼養環境が変化することが多く、様々なストレスが一気に子牛を襲う可能性があります。



◆ 段階的な離乳でストレスを最小限に

子牛にとってはミルク給与量がいきなりゼロになるよりも、段階的にミルク給与量を減らして離乳した方がストレスは少なくなります。下記の表は出生から離乳までのミルク給与量の一例です。離乳に向かってミルク給与量を減らしていくときは、新鮮な水とスターターの給与を毎日行うことが望ましいです。



◆ ストレスの重複を避けるために

離乳そのものも子牛にストレスとなりますが、離乳後に飼養場所を変更する際の移動ストレスと、群飼養へ移行した際のストレスが重なった場合、その後の発育に悪影響を及ぼす恐れがあります。飼養スペースに限りがある場合は難しいことかもしれませんが、離乳後はすぐに飼養場所を移動せず、1週間ほど経過してから移動を行うようにすると、離乳と移動のストレスの重複を避けることができます。また、哺乳中から他の牛と触れ合う機会を作ること、群飼養に移行した際のストレスが最小限になります。

中段の写真はアメリカの農場を訪問した際のものです。この農場では離乳後にカーブペンの仕切りを外し、ペア飼養を経てから群飼養へ移行する方法を取っています。

下の写真ではハッチの外に柵を取り付けて外に出られるようになっており、他の牛と触れ合う機会が作られています。群飼養へ移行する際に、元々「顔見知り」だったメンバーと一緒に移動できれば尚良いです。



◆ 離乳期のストレスを乗り越えた先には

子牛にかかる様々なストレスを可能な限り回避することで、その後の疾病発生率が低下し発育の向上が見込めます。育成牛の発育が良ければ適期月齢で受胎し、初産分娩時の体格も期待できるので難産の防止にもつながります。また結果として、牧場へ利益をもたらすばかりか管理する人側のストレスも減少するのではないのでしょうか。まずはできることから、子牛のストレス緩和を考えてみましょう。(市川雷太)

